

邪馬台国論

3章 國名と国家形態

女王の都は熊本市 卑弥呼（火神女）の出身は彦島

女王卑弥呼（火神女）の国は21の連邦国家だった。その連邦は、『倭人伝』が記録した次の21の国である。

次に斯馬國あり、次に己百支國あり、次に伊邪國あり、次に都支國あり、次に弥奴國あり、次に好古都國あり、次に不呼國あり、次に姐奴國あり、次に對蘇國あり、次に蘇奴國あり、次に呼邑國あり、次に華奴蘇奴國あり、次に鬼國あり、次に為吾國あり、次に鬼奴國あり、次に邪馬國あり、次に躬臣國あり、次に巴利國あり、次に支惟國あり、次に鳥奴國あり、次に奴國あり。これ女王の境界の尽くる所なり。

これらの国々が現在のどの地域・どの市を指すか。研究者によってまちまちである。『魏志倭人伝』（岩波文庫）の後注に、その比定地が紹介されている。

- 斯馬國……………志摩・桜島
- 己百支國……………伊勢石城また城辺・磐城・伊爾敷
- 伊邪國……………伊勢答志郡伊雜宮・伊豫・伊作
- 都支國……………伊勢度会郡榛原神社・また球珠・串伎
- 弥奴國……………美濃・また三根・湊
- 好古都……………美濃各務郡・同方県郡・河内・笠沙
- 不呼國……………美濃池田郡伊福か不破、また日置
- 姐奴國……………近江高島郡角野郷・津野神社、周防都濃郡都努國造の本拠。
また竹野・田野・多度
- 對蘇國……………土佐、また鳥栖・多布施・遂佐
- 蘇奴國……………伊勢多氣郡佐奈県、遠江佐野郡、また彼杵・佐渡
- 呼邑國……………伊勢多氣郡麻績平宇美郷、また鹿屋
- 華奴蘇奴國……………遠江磐田郡鹿苑神社・不破能母遅久奴須奴神を關係神名とする
- 鬼國……………尾張丹羽郡大桑郷または美濃山県郡大桑郷・紀伊また基肆・城
- 為吾國……………三河額田郡位賀郷又は尾張知多郡番郷、伊賀・遠賀・生葉・河愛・番賀
- 鬼奴國……………伊勢桑名郷、阿久根
- 邪馬國……………伊勢員弁野麻・八女・海部・山國
- 躬臣國……………伊勢多氣郡櫛田久之多郷・越・合志・菊池・越・御井
- 巴利國……………尾張・播磨・波良・原
- 支惟國……………吉備・紀伊・筑城・基肆
- 鳥奴國……………備後安那郡・近江小野郷または越後魚沼・大野・宇土・宇努
奴國あり。これ女王の境界の尽くる所なり。

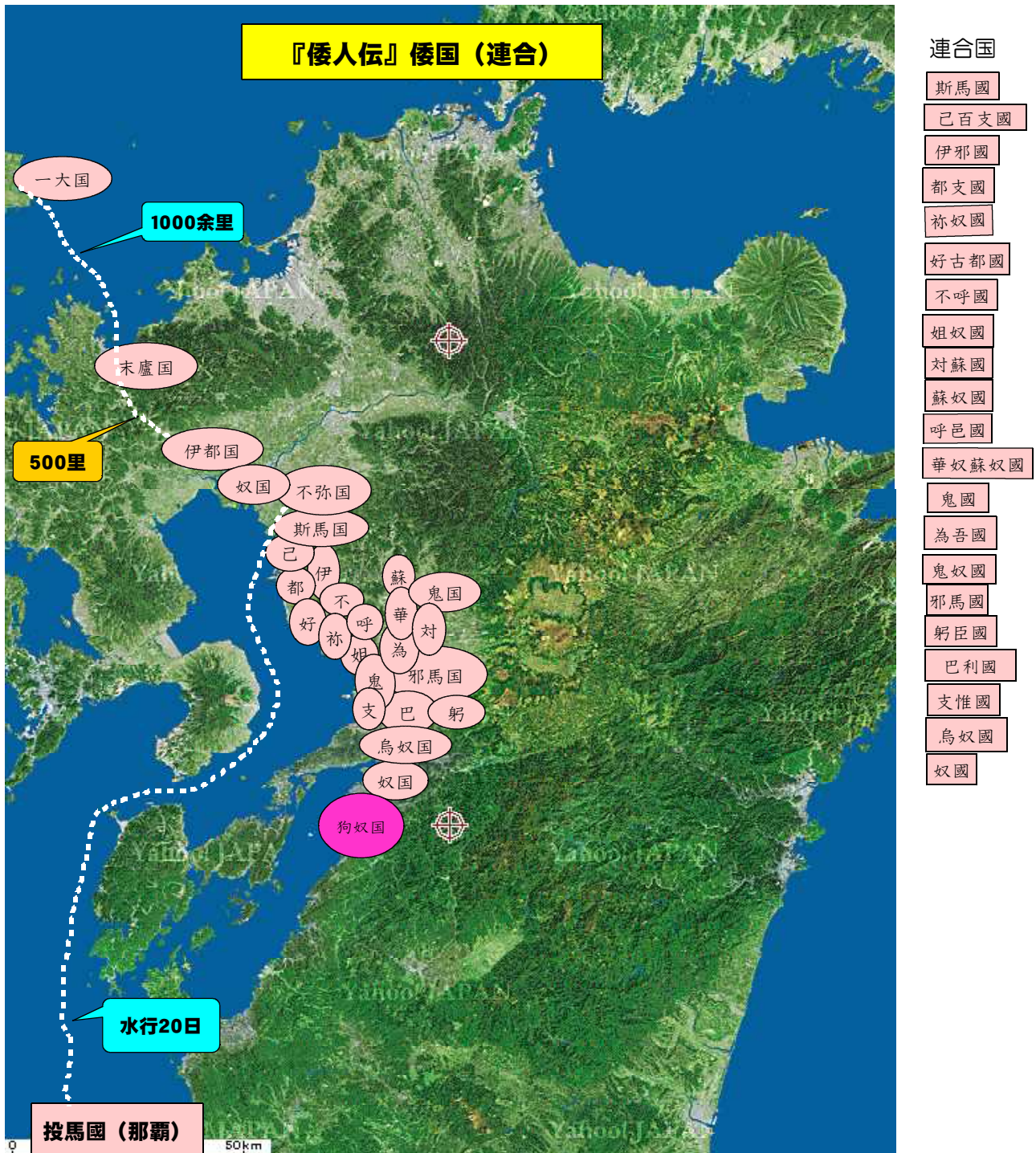
卑弥呼の国は有明海沿岸

ご覧のように、三河、尾張、三重県、滋賀県などに比定されている。このように各地に散在する比定となったのは、卑弥呼の国家形態の根本を取り違えているからである。国名も正確に解読できないからである。あ

るいは、『倭人伝』行程の「奴国」「不弥国」「投馬国」を、現代地図上で特定することを避けてきたからである。

『倭人伝』は唐津市から「伊都国」までの陸路の方角と距離を明記している。「奴国」「不弥国」への行程も同様に明記している。まず、これらの国を特定すべきである。その作業は古代史の専門研究者でなくとも可能である。方角は『倭人伝』の記述通りで変更してはならない。「1里」は100mと計算してほぼ正確である。こうして、唐津から「不弥国」に行き着くことができる。「不弥国」は筑後市である。

「筑後市」が判明できれば、「次の斯馬国」が「筑後市の南のみやま市」であることも容易に想定できる。次々と国を連ねて表記している『倭人伝』21国は近畿地方に存在したのではなく、九州有明海沿岸に存在したことも容易に理解できるであろう。上記比定で妥当と思われるのは、「烏奴国」比定の「宇土」である。



「卑弥呼」は「火神女」

その国、本また男を以て王となし、住まること七、八十年。倭國乱れ、相攻伐すること曆年、乃ち共に一女子を立てて王となす
『魏志倭人伝』

元々は男性の王で、その治世が70年～80年続いた。しかし、「倭国」が乱れたという。この「倭国」とは一つの国ではない。倭国とは21国の連合である。21国の王は、「呉」の氏族か「楚」の氏族だった。70年～80年間、いずれかの氏族の王が連邦の「大王」として統治してきたが、大王の就任を巡ってか、利害を巡ってか、その原因は未詳であるが、連合を構成する「呉」「楚」の氏族の間で争いが勃発した。「忌氏」と「熊氏」の氏族の間で生じたその内乱をいかに終わらせるか。どちらの氏族から、新たな大王を選出しても、それでは治まらない。そこで、21国の王が相談して、「共に一人の女性を王として立てる」ことにしたのである。

「卑弥呼」について『倭人伝』は実名も出身地も記していない。男王に代わって突然、一人の少女が21国の連合の王に就任することになった事情は陳寿も知らなかったのであろう。現実的、宗教的な理由が存在したであろうが、真実は分からない。しかし、卑弥呼の都が熊本市にあって、卑弥呼の仕事が「鬼道(祈禱)」ということから考えて、卑弥呼は「呉」「楚」二つの氏族の神に仕えたと思われる。その神とは何か。「阿蘇」であろう。彼女は「阿蘇の火の神」に仕えた神女だった。倭国連合の命運は阿蘇山の活動と深く関わる。倭国の命運を握るこの「火神」を鎮めることは、「祈禱」を仕事とする神女でなければできないことではない。よって、卑弥呼は「火神女」が相応しい日本語と推察した。

卑弥呼「火神女」について、その出自は『倭人伝』の一文から辿っていくことができる。「壹與」について次の記録があるからである。

卑弥呼以て死す。大いに冢を作る。径百余歩、徇葬する者、奴婢百余人。更に男王を立てしも、國中服せず。更更相誅殺し、当時千余人を殺す。また卑弥呼の宗女壹與年十三なるを立てて王となし、國中遂に定まる。政等、檄を以て壹與を告諭す。

壹與、倭の大夫率善中郎将掖邪狗等二十人を遣わし、政等の還るを送らしむ。因って臺に詣り、男女生口三十人を献上し、白珠五千孔・青大勾珠二枚・異文雜錦二十匹を貢す。

「壹與」は「卑弥呼の宗女」と説明をしている。「壹與」と卑弥呼「火神女」は同じ一族という。「壹與(いよ)」は、「台与(とよ)」とも書かれている。誤記ではなく、彼女には「二名」があったのである。ここに卑弥呼「火神女」に迫るヒントがある。

『記紀』「州産み」に「伊豫二名島」という島が現れる。この島の名は、この島の女王が「イヨ」または「トヨ」と二つの名前と呼ばれたからである。故に「二名」という島名となったのである。『記紀』では「壹與」は「伊豫」、「台与」は「豊」と書かれている。『倭人伝』「壹與」はこの出身である。

では、『記紀』「伊豫二名島」とはどこか。研究者のほとんどは現在の伊予、四国松山市を想定するが、そこではない。『記紀』の「州産み」の舞台を確定するのは容易ではなかったが、『記紀』神話の舞台の全体像がつかめればピンポイント特定は可能である。

「壹與」の故郷「伊豫二名嶋」はどこか

「伊豫二名嶋」とはどこか。この特定は、『古事記』の簡単な記述だけでできるわけではない。この不思議な名前を持つ嶋を特定するまで、「神武東征ルート」を確定し、東征の全体像を描き、何度も「州産み」に戻って整合するかどうか検証を重ねた。神武東征行路に当たる「筑紫」が特定できなければ、州産み「伊豫二名嶋」「筑紫嶋」も特定できない。全ては相関関係の中にある。

当初は「伊豫二名嶋」とは彦島全体を想定していたが、「州産み」は弥生国家である。その規模は、例えば「大阪府大阪市北区二丁目五番」という住所で言えば、「五番」に当たるぐらいのものであろう。彦島全体であるわけがない。では、彦島の中のどの島か。

「伊豫二名嶋」とは面が四つある四角形の島と書いている。彦島は現在一つの嶋であるが、航空写真で見るといくつかの嶋影が見える。これらの嶋の一つが古代「伊豫」「豊」と呼ばれた女王の嶋である。どの嶋か、形状がほぼ四角と見える島でなければならない。航空写真で彦島南部を探したが、適当な島影はない。

しかし、「伊豫二名嶋」を特定できるヒントが神功皇后の歌にあった。神功の歌が「伊豫風土記」に残されている。神功はその歌の中で、「橘の島」という名前の島を歌っている。

神功皇后御歌

橘の 島にし居れば 河遠み 曝さで縫ひし 吾が下衣

此の歌、伊豫の國の風土記の如きは、息長足日女命の御歌なり。

この『伊豫風土記』とは「愛媛県伊豫」の風土記ではない。「州産み」の「伊豫二名嶋」の「伊豫」の風土記である。神功は「州産み」の「伊豫の橘の島」に居た。

伊豫の橘の嶋に居るので川が遠い。だから、布を水にさらさないで衣を縫ってしまったことよ

「伊豫」は「橘の嶋」と呼ばれた島である。「伊豫」を見つけるにはこの「橘の島」を探してみよう。この島がどの島か解明できれば、そこが「伊豫」である。

この島の名前「橘」がヒントとなった。「橘」は、通常の意味では、木の名前である。そうすると、「橘の嶋」とは「橘の木がたくさん生えている島」と想像するであろうが、「橘」は「橘の木」ではない。「橘」とは「立ち鼻」である。「橘」は「立ち鼻」の美字である。

人間の「鼻の形」に見える島があるか。おろん、現在は単独の嶋ではないかもしれない。しかし、神功の時代には、「島」と呼ばれていた。

「橘（立ち鼻）」の島



では、「立ち鼻の島」とは彦島の中のどの嶋を云ったのか。航空写真で人の鼻に見える島影を探せばよい。「立ち鼻の島」とは、彦島老の山公園である。老の山公園はまさしく人の鼻の形をしている。鼻があり、口があり、顎がある。人の横顔である。「橘の嶋」とは彦島老の山公園である。ここが「州産み」「伊豫國」である。

「伊豫二名島」

「伊豫國」が存在した「伊豫二名嶋」は四角い嶋である。老の山公園は人の鼻に似ているが、四角い嶋ではない。では、どの島か。「橘の嶋」と呼ばれた老の山公園の近くに四角い島があるか。老の山公園のすぐ隣、顎に当たる彦島・老町、海士郷町がかかっては島だったように見える。航空写真を拡大してみよう。彦島老町はまさしく四角形である。その四辺には人が住むことができる平地がある。

「身一つにして面四つ有り。面毎に名有り。」と記した『古事記』にピタリである。

伊豫國・土佐國・讃岐國・粟國

彦島海士郷町、老町一丁目は「小戸山」と呼ばれる山を中心とした四角形の土地である。超古代、隣の老い山公園との間は海であったと思われる。やがて、州が形成され、伊邪那岐命、伊邪那美命の建国物語の時代には陸続きとなっていたのかもしれない。伊邪那岐命、伊邪那美命はこの小さな島の四つの弥生集落を統合した。

伊豫國……愛比売(えひめ)

この集落の主は「愛姫」という女性である。

讃岐國……飯依比古(いひよりひこ)

この集落の主は「飯依彦」という男性である

粟國……大宣都比売(おほげつひめ)

この集落の主は「大宣都姫」という女性である。

土佐國……建依別(たけよりわけ)

この集落は「建」の分国である。

では、これらの国々はどのような配置だったのか。

まず「粟國」と表記される国は本来は「粟(あわ)」ではなく「泡(あわ)」だったのであろう。「粟(あわ)」は「阿波(あわ)」とも表記されるが、「泡(あわ)」が原義であろう。彦島瀬戸は流れが速い。水門(すいもん)が設けられるまでは、流れは直角に曲がり、岸にぶつかって、泡と飛び散っていたと思われる。



彦島老町・海士郷町が私たちが尋ね求めた「伊豫二名嶋」である。
この女王は「伊豫の国」と「豊の国」を統治していた。「伊豫の国」とは現在の下関市彦島の老町に当たる。彦島の老の山公園は「天照」の居所、「高天原」である。

『魏志倭人伝』女王卑弥呼(火神女)は天照大神の宗族、その祈禱を引き継ぐ神女である。

九州神武天皇家と「火神女」の倭国

